

(2) 学力向上支援チームによる継続的な支援

今年度は、村山管内の32校に対して年間各3回程度の学校訪問を実施し、授業改善のPDCAサイクルを組織的に機能させるための支援を行った。学力支援アドバイザーと指導主事の役割分担を明確にし、各学校の課題や悩みに対して個別の支援を継続的に行うことで、授業改善と組織力強化の両面での支援が可能になった。コロナ禍においても、支援を希望する学校に対してのかかわりを実現させることができた。

(3) 教育マイスター制度を活用した校内OJTの充実

令和2年度村山管内の教育マイスター配置校は27校であったが、今年度新たに配置された学校が多く、かつ、マイスターの経験がない先生方が大半を占めていた。そこで、年度当初に「教育マイスター制度 村山管内の取組み事例の紹介」を作成・配付した。グループ研修を通して教育マイスター同士の連携も生まれ、必要に応じて情報を共有しながら、各校における校内OJTの充実を図ることができた。

また、これまでの課題であった「小中連携の視点による協働的な授業づくり」についても、中学校の教育マイスターが学区の小学校に出向き、助言をしたり共に検討したりする機会が増えた。

また、これまでの課題であった「小中連携の視点による協働的な授業づくり」についても、中学校の教育マイスターが学区の小学校に出向き、助言をしたり共に検討したりする機会が増えた。

(4) 「組織力の向上」と「指導力の向上」を支援する教育事務所研修の実施

<学習指導力向上研修会>

新学習指導要領及び第6次山形県教育振興計画、“教育山形「さんさん」プラン”を受けて、年間2回の学習指導力向上研修会を実施した。「学校全体で育成を目指す資質・能力を踏まえたカリキュラム・マネジメントの推進」と「各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせる深い学びの実現」の両方のバランスを大事にし、「指導と評価の一体化」を大切にしたい。今後の授業改善を支援することができた。今後、各学校の実践や様々な取組みを紹介し、次年度の取組みの質の向上につなげていきたい。

<ネットワーク型研修会>

9年間の系統性を踏まえ、新学習指導要領で育成を目指す資質・能力を確実に育むことを目指して6つの研修部会を設定し、年間を通して各部会のテーマに沿った研修を行った。

A：教科探究コース（教科の本質に迫る視点で学びを構築する）

5部会 国語 4名 算数・数学 5名 社会 3名 理科 2名 外国語 2名

B：カリ・マネ探究コース（教科等横断的な視点で学びを構築する）

生活科・総合的な学習の時間 7名

若手教員が多く、研修の学びを日常の実践に積極的に生かそうとする姿が見られた。

3 おわりに

本プランを生かした「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る『確かな学力』の育成」をより一層推進していくために、管内の各学校の強みを把握し、市町教育委員会と力を合わせて、各学校の主体性を生かした支援を継続していきたい。

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 最上教育事務所

1 はじめに

今年度はコロナ禍の様々な制約がある中、各学校において、“教育山形「さんさん」プラン”による少人数の利点を生かしたより深い子ども理解のもと、子どもの思考に寄り添い、確かな力を育む日常実践が進められてきた。また、「魅力ある学校づくり調査研究事業」の実践により、「学校が楽しい」「授業が分かる」という子どもの声に耳を傾け、一人ひとりが分かる授業、魅力ある授業を目指した取組みが積み重ねられている。

最上教育事務所では、「授業のレベルアップへ向けて」等を通して、教科の本質に迫る教材研究、探究を通してつけたたい力を育成する単元構想、つけたたい力をつける主体的・協働的な授業のポイントを具体的に示し、学校訪問等で指導・支援してきた。



2 最上管内における実践から

(1) 「学習指導力向上研修会」から

児童生徒につけたたい力をつける日常の授業改善を目指し、アクションプランを効果的に活用した学校全体の取組みについて研修を行い、講義や協議を通して以下の内容を確認することができた。参加した教育マイスターや研究主任等により各学校でアクションプランのブラッシュアップが図られ、「全職員、全教科による育成したい資質・能力を意識した日常の授業改善」が進められている。

- ・学校教育目標等から、学校として育成したい資質・能力を明確にする
- ・全国学力・学習状況等調査等を活用し、観点に沿って実態を捉える
- ・学校教育目標と校内研究、アクションプランの記載内容に一貫性を持たせる
- ・「育てたい資質・能力」「指導・取組」を焦点化して実践する
- ・客観的な評価を取り入れ、PDCA サイクルを回し改善を図っていく

(2) 「もがみ授業改善研修『プロジェクトM』」の実践

算数・数学、英語の3教科で、探究型学習におけるモデル単元の開発と公開授業を行った。第1回研修会では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」のポイントを確認し、プロジェクトメンバー間で教材研究、指導案の検討を重ね、授業を提案していただいた。

「探究型学習による授業を通して、児童生徒の“探究心”と“主体性”を育み、確かな学力をつけていく。」

- つけたたい資質・能力を明確にした単元構成
- 児童生徒にとって解決する価値のある課題の吟味
- ねらいが達成できる適切な言語活動
- つけたたい力に応じた適切な評価問題

【新庄市立萩野学園 第5学年 算数科 単元名「ならした大きさを考えよう」】

■解決する必要感のある課題の工夫

日常生活場面から児童が抱いた「1日にどのくらい水を使うのだろう？」という疑問から課題が設定され、児童が自分事として課題解決に取り組むことができた。身近な題材であることは当たり前として、解決する必要感のある課題について、さらに教材研究を充実させたい。

■学びを蓄積する振り返りの充実

学びの足跡として、「どんなことを学んだのか、考えたのか、間違ったのか」などを算数日記に記録していくことで、それまでの学びを振り返ることができる。新しい問いに出会ったときに、前時までの学びを生かして課題解決に向かうことができる有効な手立てとなっていた。



【大蔵村立大蔵中学校 第1学年 数学科 単元名「資料の活用」】

■つけたい力を明確にした課題設定の工夫

単元でつけたい力を「批判的に考察する力」とし、当該の授業では、「平均点を越えていれば、真ん中よりも上か？」という課題に取り組ませ、誤った認識を修正したり、目的に応じた根拠資料を活用して判断したりできるような学習活動や教材の工夫が見られた。さらに、日常生活と関連させた適応問題では、学んだことを生かして解決しようとすることができた。

■思考ツールを活用して学び合いを深める工夫

ホワイトボード上に得点カードを自由に並び替えながら学び合うことで、個々の考えが視覚化され、根拠を示しながら考えを出し合い、課題を解決することができた。今後は、ICTの活用により、短時間で効果的に操作活動を行いながら考えを深める学び合いも期待される。



【金山町立金山中学校 第2学年 英語科 単元名「Unit5 ユニバーサルデザイン」】

■学びを活用する単元構成の工夫

単元末にプレゼンテーションを設定し、学習したことを積み上げて伝えたいことが表現できるとともに、生徒自身が学びの成果を実感できるような単元構成の工夫があった。単元の中で数回に分けて身近な話題を題材とした自己表現活動の場を設けることで、単元末の社会的な話題についても表現できるよう意図された単元構成であった。

■意欲的な学びにつながる課題の明確化

「よさや特徴を分かってもらえるように表現する」という明確な課題が示され、学び合いの中でも改めて確認することで、生徒が課題から反れずに表現しようと思えることができた。



3 おわりに

各学校において、つけたい資質・能力を明確に設定し、児童生徒が主体的、協働的に学ぶ授業づくりが進められてきた。さらに、以下のポイントを充実させることで、児童生徒個々の力を最大限に伸ばし、確かな学力を育成していきたい。

- ・育成したい資質・能力を明確化した単元構想
- ・見方・考え方を働かせ、深い学びを実現する授業改善
- ・目標と一貫性のある適切な問題・方法・場面による確実な評価

【つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業による「確かな学力」の育成】

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 置賜教育事務所

1 はじめに

昨年度まで5年間の「さんさん」プランを基盤とした探究型学習の推進により、探究型学習の周知が図られ、管内の多くの学校で探究型学習による授業改善が進んでいる。

特に、学ぶ側の思考に立った授業づくりが進んでいること、課題設定や協働的に学ぶ場面の設定、振り返りの位置付け等、プロセスにおける工夫改善が進んでいることは大きな成果だと捉えている。

この成果を「確かな学力」の育成に確実に結び付けていくために、今年度置賜教育事務所では、授業づくりの重点を見直し、「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」を推進してきた。具体的には管内の学校が授業改善の拠り所とできるように「考える力を育む授業づくりのスタンダード」を作成し、これを管内の市町教育委員会及び各学校に送付して活用を促すとともに、要請訪問等での指導助言や主催事業に反映させ推進を図ってきたところである。

以下、「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」の推進の具体について紹介する。

2 「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業づくり」の推進

(1) 「考える力を育む授業づくりのスタンダード」を活用した授業改善の促進

【授業づくりの基本的考え】

具体化

【考える力を育む授業づくりのスタンダード】

	＜生きる力の基盤となる確かな学力の育成＞
①「つけたい力は何か」 そのために ②「何を学ぶのか」 「どのように学ぶのか」 ③「その学びに必要な力は 何で、その力はどの程度 身につけているのか」 ④「学びを成立させるため に必要な手立ては何か」 そのために ⑤「つけたい力はついたの か」、「ついていなければ どう補完するのか」	1 各種調査等の分析から見える児童生徒の実態把握と身につける力の明確化 指導内容に関する児童生徒の実態(何ができて、何ができないのか)を把握しましたか 学習指導要領の内容(何を学ぶのか)と児童生徒の実態を踏まえて、身につける力を設定しましたか 単元の目標を達成した姿(何ができるようになればいいのか)を児童生徒と共有していますか
	2 教科特有の見方・考え方を働かせながら課題解決していく学習過程(どのように学ぶか)の重視 働かせる見方・考え方(何を手がかりに考えるのか、着眼点は何か)を意識していますか 目標達成のために、一番考えさせたいこと(本時、単元)は何で、効果的な学習形態は何ですか 教科の本質に迫るための教師の手立て(深めるための問いなど)が明確になっていますか
	3 児童生徒の主体的な学びにつなげるための振り返りの場の設定 考えの広がりや深まりを自覚する振り返りになっていますか 単元全体の課題解決と振り返りがつながっていますか
	4 目標-指導-評価の一貫した単元-授業構想 学習指導要領の内容を踏まえ、目標を適切に設定していますか 学習過程において、必要に応じた学習状況の把握をしていますか 把握した学習状況に応じて、目標達成に必要な適切な指導をしていますか 目標に対する個々の学びの評価(力がついたかどうか)を確実にを行い、指導の改善につなげていますか

これらを授業づくりの基本と捉えて、目標-指導-評価の一貫した授業が実施されるようにした。

(2) 「考える力を育む授業づくり研究会」でのスタンダードの具現化

小学校(国語、算数、社会)と中学校(数学)の4教科5部会で指導主事と教科研究員がチームになり、上記「考える力を育む授業づくりのスタンダード」に基づいた授業を構想し発信することで「つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業」とはどのようなものか、その具体を示した。

算数については2部会、その他は1部会を設定し実施した。今後管内の教科指導の核となる若手教員を教科研究員に委嘱し実施した。

実践を通して得られた教科研究員の気づきと成果

<小学校国語> (第6学年で実施) 研究員 米沢市立北部小学校 鈴木 麻実 教諭

単元名 複数の文章を基に、「これからの社会と生き方」について自分の考えをもって話し合おう
教材名 『メディアと人間社会』池上彰、『大切な人と深くつながるために』鴻上尚史(光村図書)
資料 プログラミングで未来を創る

指導事項を教材で具体化していくための教材研究が何より大事であること、国語でもレディネステストを実施し課題を明らかにする必要があることに気付いた。筆者の主張を捉えるために、論の展開や表現の仕方に着目させたことが「言葉による見方・考え方」を働かせながら、叙述に沿って読み込む児童の姿につながった。

<小学校算数> (第5学年で実施) 研究員 米沢市立愛宕小学校 後藤 祐平 教諭

単元名 割合 比べ方を考えよう(2) (東京書籍)

つけたい力とレディネスの結果を結び付けながら、単元の構想や指導に生かすことが重要であること、つけたい力を明確にし、要点を絞った教材研究を行う必要があることに気付いた。数直線の読み取り、算数用語を用いた説明、求める量の見当などを意識して活用する指導過程としたことが、単元末にそれらを自在に使って思考する児童の姿につながった。

<小学校算数> (第4学年で実施) 研究員 高島町立高島小学校 山田 思美 教諭

単元名 分数をくわしく調べよう (東京書籍)

児童に働かせたい「数学的な見方・考え方」を指導者が意識することやつけたい力を明確にしたうえでレディネステストの問題を選定し誤答を分析することが、授業の効果を上げる上で重要であることが分かった。「単位分数」に着目させた指導を重ねたことが、テープ図で1を認識して等分しながら帯分数の減法の仕方を考え、説明する児童の姿につながった。

<小学校社会> (第4学年で実施) 研究員 高島町立屋代小学校 阿部 達也 教諭

単元名 「置賜に水を 黒井半四郎」

地域の歴史的な出来事を教材化するための教師自身の教材研究の深さがその後の授業に大きく影響すること、児童の思考の流れを意識して授業を構成することが大事であることに気付いた。思考ツール「クラゲチャート」の活用が児童の思考を助け、各自が調べた複数の事実を総合・関連付けて概念化する児童の姿につながった。

<中学校数学> (第3学年で実施) 研究員 小国町立小国中学校 佐々木 健吾 教諭

単元名 標本調査 (啓林館)

どのような力を身につけ、どのような姿に変化してほしいのかを具体的にイメージすることで、単元構成に一貫性が出てくることに気付いた。活動の必要性を明らかにして思考の流れに沿う形で活動を仕組んだことが、標本調査の妥当性を議論し、調査方法を洗練させて再考する生徒の姿につながった。

3 おわりに

指導内容に関する児童生徒の実態を事前にしっかり把握した上で単元を構想することがいかに重要であるかを実感した上記の取組みであった。細やかな診断的評価が可能になることは「さんさん」プランの強みである。その強みを最大限生かし、来年度も実りある実践を積み上げ、広く発信することで置賜管内の学力向上につなげていきたい。

【つけたい力を明確にした、教科の本質に迫る授業による「確かな学力」の育成】

“教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント
庄内教育事務所

1 はじめに

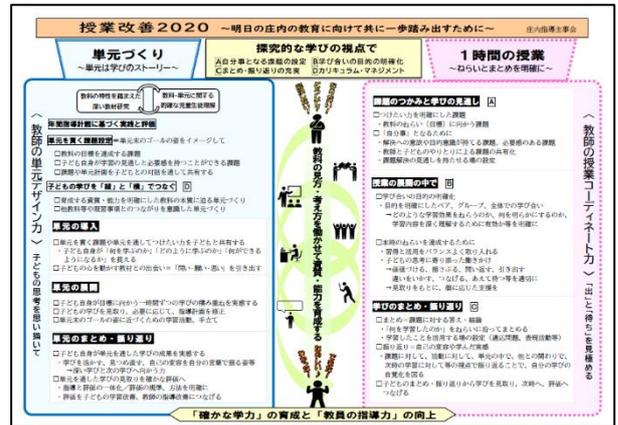
今年度、コロナ禍という今まで経験したことのない状況の中、管内各学校においては、確かな学力の育成を目指して、試行錯誤を繰り返し、様々な工夫をしながら、確実に丁寧な授業づくりがなされている。また、学校教育ならではの学びを大事にしながら教育活動を進めるために、「大切にしなければならないことは何か」「学校の役割とは何か」ということを問い直し、教育課程や学校研究、授業づくりの見直しが図られている。

その際、本プランの目的である「きめ細かな指導の充実」や「分かる授業」の大切さが再認識され、変化の激しい社会に対応できる資質・能力の育成、学校の組織力の向上、教員の指導力向上に向けて、意識が高まっている。

今こそ、本プランのよさを活かし、探究型学習の視点からの授業改善を推進していきたい。

2 授業改善2020～明日の庄内の教育に向けて共に一歩踏み出すために～

庄内では毎年、管内の市町教育委員会指導主事と教育事務所指導主事で学力向上に向けて協議を行い、成果と課題を確認し、次へ向けての一手を共有している。その際、授業改善に向けた指導の重点をワンペーパーで作成し、同じ方向を目指し、指導・助言に活かしてきた。探究型学習のポイントを「探究的な学びの視点」として示し、単元デザイン力と授業コーディネート力という2つの柱でまとめ、授業づくりの指針としている。



これまで、指導主事の資料とし、必要に応じて配布・活用してきたが、今年度より「探究型学習」等の視点からの授業改善をより推進してほしい、先生方の授業づくりの一助としてほしいという思いから全小中学校に配信することにした。新学習指導要領の趣旨も盛り込んでいるので、次年度は大きく変えずに、継続して先生方に伝えていくことで、力強く授業改善を進めていくことを庄内指導主事会議で確認し合った。

3 庄内管内における実践から

(1) “教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師研修会の実施

庄内では“教育山形「さんさん」プラン”に係る非常勤講師の先生方を対象に、それぞれの非常勤講師の配置の意図に沿って、少人数指導のあり方や生徒理解等について研修を深め、個々の資質の向上を図ることをねらいとして研修会を実施している。

今年度は、役職ごとの研修会を1回のみ実施した。T T指導や個別指導等で、実際に子どもたちの指導に携わる先生方を対象に、新学習指導要領の改訂の趣旨や学習評価の在り方についての研修会を行った。また、別室登校学習指導に関わる先生方を対象に、教育相談員・SSW研修会と兼ねて行い、具体的な事例を持ち寄り、生徒の関わり方や指導の在り方について意見交換を行った。一人ひとりに目が行き届くきめ細やかな指導の充実に向けて、今後も本研修会を大切にしていきたい。

(2) ICT推進拠点校の取組みと成果 (◎学校研究から ○授業づくりから)

【遊佐町立吹浦小学校】

「学ぶ楽しさを味わい豊かに考える子どもの育成」

- ◎「単元・題材の目指すゴールの姿」「学習課題」を明確にすることを授業づくりの視点として取り組んだ。
- ◎教科の「見方・考え方」を働かせて学ぶ楽しさを味わわせるために効果的なICTの活用を充実を図った。
- 今までの実践（ノートづくり、協働的な学び）も大切にしながら、タブレットを活用することで、学びの質が高まる授業づくりがなされていた。
- 授業後、子どもたち自らが板書を撮影し、学びの過程を振り返ったり、既習事項を提示したりする姿があり、学びのサイクルにつながっていた。



【鶴岡市立温海中学校】

「主体的に学び、自分の考えを表現できる、心豊かな生徒の育成」
～将来につながる深い学びを目指して～

- ◎生徒の主体性を引き出すために、「課題設定」と「振り返り」を授業改善の視点として取り組んだ。
- ◎生徒同士の学び合いを大切に、教科の学びの質が高まる協働的なグループワークの工夫を行った。
- 生徒が自分の端末を使い、自分なりの視点で演技を記録・保存することで、自分の技術の変化や進化を、より客観的に観察することができ、学びの実感につながった。
- 既習事項や既習資料がファイルに蓄積されており、試行錯誤する場面において、自在に活用でき、思考の深まりにつながった。



(3) 「学校研究ワンアップ研修会」

今年で3年目となった本研修会だが、今年度は1回のみ開催となった。内容を学習評価の在り方に絞り、事務所で作成した「学習評価リーフレット」を活用しながら、研修を行った。後半は、コロナ禍において、どのように学校研究を進めていくかという視点で情報交換を行った。

校外の研修会や授業研究会が中止になり、研修の機会が減った中で、校内で試行錯誤しながら、OJTの活性化と充実化が図られていることが話題になった。評価ミニ研修会、教科部会の充実、オンライン研修会等、確かな学力の育成に向けて、また、土台となる「担任力」アップに向けての、各学校の工夫した取り組みを、指導課通信を活用して発信した。



4 おわりに

本プランを生かした「探究型学習」の視点からの授業改善をより推進し、子どもたち一人ひとりの力を最大限に伸ばすために、学校として育成を目指す資質・能力を明確にし、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていく必要がある。

これからも、庄内管内の小・中学校、市町教育委員会と共に、力強く歩みを進めていきたい。